內政部警政署藏書

山本健吉編

最新俳句歳時記

春

文藝春秋刊

最新俳句歳時記　春

昭和四十六年三月　十　日　第一刷
昭和五十二年四月二十五日　第十三刷

編著者　山本健吉

発行者　樫原雅春

発行所　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号一〇二

印刷　精興社
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函

万一落丁乱丁の時はおとりかえいたします

© KENKICHI YAMAMOTO　Printed in Japan

まえがき

私は昭和三十一年に『新俳句歳時記』を出し、同じく三十九年にはその増補改訂版を出した。それは絶版になって久しいが、その後あの歳時記はどうしたと、私のところへ問い合せて来る人もたびたびあり、私も改訂の志を持っていないではなかった。

歳時記という書物は、どうも五年ないし十年に一度は、増補改訂すべきものであるらしい。いろいろの書物や新聞雑誌で眼に触れたり、旅行その他のおりに見聞したり、そのときどきに気づいた事項をメモして置くと、それが数年のうちには思わぬ嵩になるのである。だから増補改訂という仕事も、自然にメモが溜って来たから、それにうながされて、自然にやらなければならない気持になるのだ。話があったから取りかかるというのでなく、そういった因縁でこれは出来上るのだし、これは私が生きているかぎり、続けられて行くだろう。

「私の歳時記に対する興味には、たんに俳句の歳時記としてでなく、ひろく日本の季節的な風土現象を、この国土に住む者として、知りつくしたいという気持があった。」私は『新俳句歳時記』を出したとき、「編者のことば」としてこう書いている。私が俳句作家にまかせて置けばよかろうと思われる歳時記の編纂をあえて手がけたのも、結局は日本の風土とそこに繰り拡げられて来た人間の生活史について、知りたいと思う心が深かったからである。これまでの歳時記の編者を考えてみても、北村季吟にせよ貝原益軒にせよ四時堂其諺にせよ滝沢馬琴にせよ中谷無涯にせよ、俳人というより、生活的興味から、あるいは学問的興味から、歳時記のことにかかわっているようだ。彼等の歳時記に較べると、私のは著しく日本風土の詩である俳句そのものへの興味が深い。だがそれにもかかわらず、私の歳時記に寄せる興味の中心は、日本の風土への愛と認識とにある。

私はこれまでの歳時記に対し、柳田國男・折口信夫両先生の民俗学の学問にいささか触れた者として、年中行事その他の民間伝承の解説がきわめて幼稚なことに、非常に不満であった。だがなおよく見て行くと、自然現象や動植物の解説も、たいへん不備であり、風の名のごときは江戸時代の『物類称呼』の説を一歩も出ずず、鳥類魚類その他の博物全般にわたっても、今日の学問的成果を顧みないで、でたらめな扱いがなされていることを知った。歳時記ほど古風な学問と古い叙述の形式とを、長く保存していたものは、外に例を見ないのではないかと思う。

国語学・国文学・歴史学・民俗学、あるいは気象学・地理学・海洋学・農学・生物学その他、あらゆる学問的分野の今日における成果が取り入れられなければならないことは、言うまでもない。その他、学問とは言えないだろうが、釣や料理や衣類やスポーツや、人間生活のすべてに対する旺盛な興味が必要である。日本の風土現象と人間生活についての客観的記述を志すなら、それらは当然の前提条件なのである。

だがそれと同時に、これが季節現象を通じて養われた日本人の美意識の表現でもあることに、歳時記編者は留意しなければならない。科学的認識よりも、長い歴史の上に創り出された日本人の美意識の方を重んじていることがしばしばである。蝶は四時見られ、もっとも出盛るのは夏だとしても、歳時記の上では春に分類される。それは蝶の初出の時期を重んじたものであり、蝶を春季とすることは、長い歴史を通じて築かれた日本人の美意識が納得したことなのである。それは非科学的だと非難しても、それは何にもならない。そのような不合理をもあえて許容するのが、歳時記という一つの秩序の世界なのだ。それは真であると同時に、美でもある世界である。それは日本という島国の風土現象の全体的認識であるとともに、千数百年にわたって日本人が磨き上げ築き上げて来た一つの美的創造物——あえて言えば一つのフィクションの世界でもあるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だから、諸氏が例えば任意に手に取った歳時記の、「花」の項目をひろげて見て、「花とは桜のことである」という解説で簡単にすませているものがあったとしたら、それは駄目な歳時記なのである。少なくともそれは、歳時記という書物の叙上の二重の性格について、認識するところが浅いのである。古くから俳人たちが、「花」という季題の本当の性格を説き明かそうとして、「花とは桜をいへど、ただおしなべて千草万木のうへにもわたり侍る」（季吟）とか、「花といへるは賞翫の惣名、桜は只一色の上也」（許六）とか、たいそう骨を折って「花」という季の詞の意味の重層性を言い取ろうとした、経験上から来た作家の知恵が無視されてしまうのだ。

俳句に遊ぶということは、一面では日本の風土現象と日本人の生活全般にわたってのこまやかな認識を目指すことであるとともに、他面では日本民族の長い心の歴史の上に築き上げられた一つの美的秩序の世界、擬制的な約束の世界に遊ぶことなのである。そのことを知ったら、春は花、夏は時鳥、秋は月、冬は雪といった日本人の四季に寄せる心ばえを、無意義として簡単に捨て去ってしまうこともないだろう。

今日のような、自然に対する科学技術の攻勢の激しい時代においては、人びとは急速に季節感情のごときものは失って行きつつある。そのことを盾に取って、今日キュウリやイチゴを夏とし、マグロやブリを冬とすることを、愚かしいことと思うかも知れない。無季俳句の主張は、ことに自然の季節現象を人為的に変改しつつある今日の社会において、合理的として受け容れられる傾向にある。野菜や果物の促成栽培――それは農家の利潤をあげるために競争で試みられているのだが――が出廻っている今日において、ホウレンソウが春であり、キャベツが夏であり、エダマメが秋であり、ネギが冬であるなどということは、かえって人為的分類の不自然さを露呈していると思われるかも知れない。

だがそうではないのだ。それらのものが四季を問わず食膳に上ることを、私といえども否定するわけではない。だが私は、その

ものが本来、自然の状態においては、いずれの季節に属するか、そのことの知識を忘れて欲しくないだけのことである。トマトやキュウリは年中出廻り、ことに季節外れの冬場は値が高いので、農家では争って作るだろうが、それはその本来のあるべき姿において、夏の季節のものであることを教えるのが、歳時記の役目なのである。

そう考えてみると、歳時記は今日の開発攻勢による自然の秩序の破壊の時代に、いささかの役割を担っていることになろう。そしてこの役割は、考えてみると、人類の未来にとって意外に大きな問題の一環を担う一つの抵抗行為であることに気づくのである。

昭和四十六年一月十日

山本健吉

編纂の方針

一、本書は春の部・夏の部・秋の部・冬の部・新年の部の五冊をもって完結する。

一、四季各冊は、従来の時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物という分類法、あるいはそれに類似の分類法を廃し、三月にわたるものと初・仲・晩との四部門に分けた。それは従来の分類法における初春の季語と晩春の季語とを、無差別に春の季題として並列するような曖昧さを避けたかったからである。ただし、二月にわたるものは、それぞれの場合の判断に従った。

一、季語の分類は次の原則による。

春　立春（二月四日）から立夏の前日（五月五日）まで
夏　立夏（五月六日）から立秋の前日（八月七日）まで
秋　立秋（八月八日）から立冬の前日（十一月六日）まで
冬　立冬（十一月七日）から立春の前日（二月三日）まで

この原則を立てることによって、本書では、たとえば「メーデー」（五月一日）と「八十八夜」（五月二、三日）とは、ともに晩春の季語となる。従来の歳時記は、「メーデー」を夏とし、「八十八夜」を春とするような愚かしい分類をやっていたのである。ただし「子供の日」（五月五日）は、端午の関係から初夏に分類しておいた。

一、各季の初・仲・晩の分類は、つぎの原則に従った。

初春（陽二月・陰一月）　立春（二月四日）から
　啓蟄の前日（三月五日）まで
仲春（陽三月・陰二月）　啓蟄（三月六日）から
　清明の前日（四月四日）まで
晩春（陽四月・陰三月）　清明（四月五日）から
　立夏の前日（五月五日）まで

初夏（陽五月・陰四月）　立夏（五月六日）から
　芒種の前日（六月五日）まで
仲夏（陽六月・陰五月）　芒種（六月六日）から
　小暑の前日（七月六日）まで
晩夏（陽七月・陰六月）　小暑（七月七日）から
　立秋の前日（八月七日）まで
初秋（陽八月・陰七月）　立秋（八月八日）から
　白露の前日（九月七日）まで
仲秋（陽九月・陰八月）　白露（九月八日）から
　寒露の前日（十月七日）まで
晩秋（陽十月・陰九月）　寒露（十月八日）から
　立冬の前日（十一月六日）まで
初冬（陽十一月・陰十月）　立冬（十一月七日）から
　大雪の前日（十二月六日）まで
仲冬（陽十二月・陰十一月）　大雪（十二月七日）から
　小寒の前日（一月四日）まで
晩冬（陽一月・陰十二月）　小寒（一月五日）から
　立春の前日（二月三日）まで

ただし季節と年時とは正確に一致するわけではない。たとえば、「メーデー」が五月の行事であるのに晩春に分類されたり、「文化の日」が十一月の行事であるのに晩秋に分類されたりしているのは、それらがそれぞれ、立夏・立冬以前の行事だからである。

一、地方によって、陽暦で行なわれたり、陰暦（または月遅れ）で行なわれている行事は、分類上もっとも頭を悩ます問題である。たとえば「七夕」「盂蘭盆」などは、東京では盛夏の季感を持つが、京阪地方はじめ多くの地方では昔どおりの初秋の季感を持つ。本書では、それらは地方生活の上での季感の滲透度の深さと、伝統的に担っている行事の意味とを考えて初秋の部に入れた。同様の考えから、「雛祭」は晩春、「端午」は仲夏に入れた。そのため、「雛祭」と「桃の花」、「端午」と「菖蒲」、「七

夕」と「天の川」などが、別の季に分類されるという不合理は消滅する。ただし、灌仏（仏生会・花祭）は、東北地方などを除いて全国的に陽春四月の行事と化してしまった大勢に抗しがたく、古来卯月八日の行事として初夏の季を持っていたのを、今は桜花のさかりの行事として晩春の季に置かざるをえなかったのである。

一、新年の部を独立させたのは、都会地の大部分は新暦に従いながら、農村では依然として旧正月をやっていることから、新年行事を冬の部に入れても春の部に入れても、不合理なことが起るからである。たとえば、農村だけでしか行なわれない新年行事を、冬の部に入れることもできないし、都会で主として行なわれる新年行事を、春の部に入れるのも変である。だがその双方とも、新年季題として並列されることは、不自然ではない。そのことが、新年の部を独立させた最大の理由である。同様の理由で、冬の部には初・仲・晩のほかに、歳末の項を設けた。そこには明らかに歳末の意味を帯びた、たとえば「煤払」「年の市」「餅搗」「除夜」などの季語だけを集め、従ってそれは地域によってあるいは新暦十二月（仲冬）、あるいは旧暦十二月（晩冬）に行なわれる行事なのである。

一、三月にわたるものと初・仲・晩の四部門では、おおよそ時節・気象・暦日・山野・園芸・水沢・海洋・田園・行事・飲食・遊戯・雑などに分類したが、これは読者の検索の便をはかったもので、それらの項目は本文でなく、各ページの柱に示した。

一、「田植時」「菫野」「嚶翠若葉」「芍薬の芽」「鶯の巣」などといったものは、季題として独立させる必要がなく、それぞれ「田植」「菫」「草若葉」「草の芽」「鳥の巣」などの季題に、傍題として含めておけば十分である。その点から、従来の歳時記に見られた季題の乱立を、できるだけ統合し集中する方針を立てたが、その原理を無制限に適用したわけではない。たとえば、「花」と「花見」、「月」と「月見」、「稲」と「稲刈」、「鷹」と「鷹狩」、「蝶」と「初蝶」などは、それぞれを独立した季題と

して立てている。要はそれらが独立季題（または季語）として堪える重さを持っているかどうかにかかっている。

一、季題・季語は一、二の例外はあるが、日本本土の季節現象を選んだ。また、現在すでにうち絶えた行事の多くは、廃題として整理した。もっとも作句例がこれまでも現在でも見られる「絵踏」「寒食」「曲水」「薬喰」などの季題は、残しておいた。「亀鳴く」「蚯蚓鳴く」「獺魚を祭る」などの空想的季題も、作句されているかぎり残した。

一、山・野・川・池・沼・湖・海・潮・波・水・田・畑などの地理上の名目、あるいは暁・朝・昼・夕・宵・夜などの時間上の名目に、四季の言葉を冠して、「春の水」「秋の朝」などの季題がやたらに立てられているが、これも季題として妥当と思われるもの、例句が数多く作られているものだけに整理した。「春の水」が季題として妥当性を持っているからといって、「夏の水」「秋の水」などが、すべて妥当であるという理由にはならない。また「春の日」「秋の日」などは、従来分類上の必要から、時候と天文とに重出しているが、本書ではその必要を認めなかった。また二十四気は暦の上で、季節の移り変りのポイントをなすものだから、すべて季題として採用したが、七十二候になると、あまりにこまかく区分され、日本の季節の実情にそぐわない面もあるので、少数（たとえば「魚氷に上る」「獺魚を祭る」など）を除いて、採用しなかった。だが、新年の部の付録に、二十四気、七十二候表をつける。

一、年中行事は生活に関係の深いものに重点を置き、神社の祭礼などは、古来著名のもの、印象の強いものに重点を置いた。忌日は、現実に修忌のことがあるもの（利休忌・蓮如忌・大石忌など）を主とし、それにたとえ特定の行事が行なわれていなくても、季題としての趣きの深いもの（業平忌・西行忌・蟬丸忌など）を加えた。忌日は、歳時記では無制限に膨張しうる部分であって、「チェーホフ忌」「ニーチェ忌」にまで及べば、古今東西の有名人の忌日はすべて包含しなければならなくなる。そのような煩雑さは、本書では取らなかった。ただし、そのかわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りに、新年の部の付録に、著名な人の「忌日表」をつけることにした。

一、解説は平易・簡潔・正確をむねとした。作句者の便宜をも顧慮して、季題の左側に歴史的かなづかいをルビで示した。ただし漢字の音は、これを除く。たとえば「光悦忌」はとくに左側に「くわうえつき」と示さない。

一、解説の文のなかに、ゴシック活字で示したものは傍題ならびに異名・種類である。傍題・異名・種類はできるだけ多くを網羅した。〔参照〕として示したものは、その季題と関連を持つ他の季題を示したものである。

一、例句は古句より現代にわたり、ことに現代のものを多く挙げた。採用標準は、例句として妥当なものであることを原則とし、またできるだけ多くの流派の句にわたることを心がけた。だが適当な例句が見つからなかった場合、かならずしもこの標準に厳密に従ったとは言えないものもある。例句は原作を尊重して、新かなづかいによらなかった。例句のない季題・季語も、当然例句が現われるべきことを予期して、あえて掲げた。

一、各巻に、目次のほかに、五十音順の索引をつけたが、新年の部には、全巻にわたっての季題ならびに主要な傍題・異名の総索引をつけることにした。

目次

まえがき……一
編纂の方針……五
三春……一五
初春……二七
仲春……一六一
晩春……二四一
音順索引……二六一

三春

時節

春……二六
春光……二七
麗か……二七
長閑……二八
暖か……二九
春の日……二九
永日……三〇
遅日……三一
春暁……三二
春晝……三二
春の夕……三三
春の暮……三四
春の宵……三四
春の夜……三五

気象

春の空……三六
春の雲……三六
霞……三七
鐘霞む……三八
朧月……三八
朧……三九
春の月……四〇
春の星……四一
春の闇……四一
東風……四一
春風……四二
風光る……四三
ようず……四三
春陰……四三
春雨……四四
春霖……四五
春時雨……四五
春雷……四五
春の雪……四六
淡雪……四七
斑雪……四八
春の霙……四八
春の霰……四八
春の霜……四八
春泥……四九
春の土……四九

陽炎……五〇
春荒……五一
春塵……五一
霾……五二
フェーン……五二

山野

春の山……五三
山笑う……五四
春の野……五四
獣交る……五四
孕鹿……五五
春の鳥……五五
囀……五五
花鳥……五六
百千鳥……五七
貌鳥……五七
鶯……五八
雲雀……五九
河原鶸……六〇
雉……六〇
山鳥……六一
小綬鶏……六一
鳥の巣……六一
鳥交る……六二
蝶……六四
蜂……六六
虹……六七
春の蠅……六七
春の草……六八
摘草……六八
蓬……六九
蘂……七〇
蕚……七〇
芹……七〇
三葉芹……七一
水苦蕈……七一
和蘭芥子……七一
ていれぎ……七二
防風……七二
野老……七二
菫……七三
蒲公英……七四
雀の帷子……七六
春落葉……七六
椿……七六
雛菊……七七

水沢

春の水……七七
春の川……七八
亀鳴く……七九
蛙……七九
鮎放流……八〇
乗込み……八〇
上り簗……八一
柳鮠……八一
わたこ……八二
諸子……八二
鰉……八三
田螺……八三
蜷……八三
蜆……八四
烏貝……八五

海洋

春の海……八五
春の波……八六
春潮……八六
赤潮……八七
あび……八七
春飛魚……八七
春鰯……八八
眼張……八八
あいなめ……八八
鰹……八八
ごんずい……八九
めじ……八九
蛤……八九
浅蜊……九〇
潮吹……九〇
馬鹿貝……九〇
馬刀貝……九一
貽貝……九一
鳥貝……九一
月日貝……九一
板屋貝……九一
簾貝……九一
櫻貝……九一
寶貝……九二
細螺……九二
榮螺……九二
常節……九四
磯巾着……九四
寄居蟲……九四
望潮……九五
藻屑蟹……九五
和布……九五
漆草……九六
荒布……九七
黒布……九七
廣布……九八
千頴藻……九八
鹿尾菜……九八
角又……九九
海雲……九九
蔓藻……一〇〇
白藻……一〇〇
青海苔……一〇〇
石蓴……一〇一
海髪……一〇一
櫻海苔……一〇一
樺海苔……一〇一
松海苔……一〇一
鶏冠菜……一〇一
海松……一〇二

田園

春田……一〇三
耕……一〇四
畑打……一〇五
農具市……一〇五
青麥……一〇六
春大根……一〇六
櫻島大根……一〇七
芥菜……一〇七
あざみ菜……一〇七
黒菜……一〇七

コンフリー……一〇八
玉巻くキャベツ……一〇八
萵苣……一〇八
春菊……一〇九
紫蘇の芽……一〇九
蓼の芽……一〇九
春椎茸……一〇九
春の苺……一一〇
春の蜜柑……一一〇
オレンジ……一一〇
三寶柑……一一〇
伊豫柑……一一一
八朔柑……一一一
晩白柚……一一一
春園……一一一

行事

春祭……一一一
伊勢参……一一三
開帳……一一三
遍路……一一三
春闘……一一四

飲食

干鱈……一一四
目刺……一一五
白子干……一一五
青鰻……一一六
菜飯……一一六
酢莖……一一六
椿餅……一一七

衣住

春服……一一七
春袷……一一七
春外套……一一七
春ショール……一一七
春手袋……一一八
春障子……一一八
春の爐……一一八
春炬燵……一一八
春暖爐……一一九
春火鉢……一一九
春燈……一一九
團扇作る……一一〇
春挽絲……一一〇

遊戯

凧……一一〇
ぶらんこ……一一一
風車……一一一
風船……一一一
石鹸玉……一一一
春スキー……一一三

雑

春眠……一一三
朝寝……一一四
春の夢……一一四
春愁……一一四
春意……一一五
春興……一一五
春の風邪……一一六
佐保姫……一一六

初春

時節・気象

初春……二八
二月……二八
睦月……二八
早春……二九
春淺し……二九
冴返る……二九
餘寒……二九
春寒し……二九
春めく……二九
春遲し……二九
春一番……二九
春北風……二九
薄氷……二九

暦日

寒明……二九
立春……二九
魚氷に上る……二九
雨水……二九
獺魚を祭る……二九
二月盡……二九

山野

落し角……二九
山燒……二九
末黑の薄……二九
梅……二九

黄梅……二九
金縷梅……二九
ミモザ……二九
猫柳……二九
山茱萸の花……二九
下萌……二九
蕗の薹……二九
節分草……二九
いぬふぐり……二九
洲濱草……二九
片栗の花……二九

園芸

松雪草……二九
クロッカス……二九
君子蘭……二九

水沢・海洋

白魚……二九
公魚……二九
鮠挿す……二九
飯蛸……二九
磯竈……二九
海苔……二九
岩海苔……二九
海猫渡る……二九
渡り漁夫……二九

田園

畑燒……二九
芝燒く……二九
麥踏……二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com